

令和三年度 新作カタログ

忠 保ただやす の甲冑

日本の心を伝統の技術に託す



弊社製品は全てPL法を順守の上、PL保険の対象品です。

*このカタログに掲載の商品の色は、印刷のため実物と異なる場合がありますので、予めご了承ください。

類似品にご注意ください

胴丸鎧
高貴こうき
「七・十号」

令和三年度

忠保の甲冑

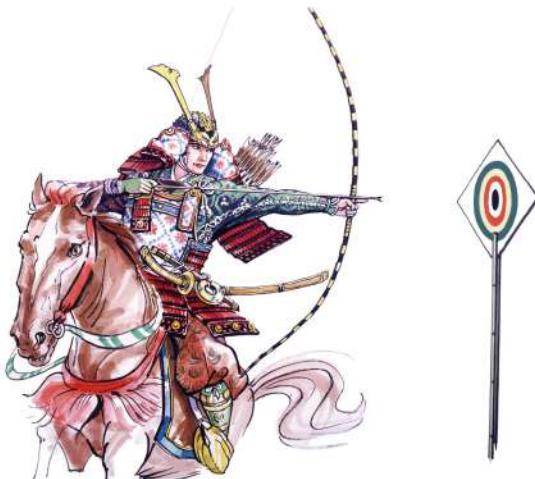
新作カタログ 目次

智、仁、勇 — 忠保の甲冑縁起

やぶさめ

端午の節句と流鏑馬

端午の節句は中国から伝わった風習だといわれています。初めは息災を祈るための行事だったようで、「端」ははじめを表わし「午」は午の日——午と五の音が同じことから五日を端午の日とし、五月に限らず奇数月に行われていたようです。奈良時代にはすでに五日節会として、宮中で行われていました。この端午の節会が男の節句となつたのは、節会の後に行われる騎射の催しや、流鏑馬の催しが宮中の恒例行事になつた頃からだとされています。



江戸時代に外から家のなかへ

端午の節句に飾る菖蒲が「尚武」に通じることから、鎌倉時代以降、いっそう発展し徳川幕府となってからは、五節句（二月七の七種節供・三月三日の桃節供・五月五日の菖蒲節供・七月七日の七夕祭・九月九日の菊節供）の一つとして厳粛な儀式が行われ、武家では旗、幟、差物、吹流しなどを屋外に飾り立てて祝いました。しかし、町人の間では旗差物を立てることは許されていませんでしたから、代わりに鍾馗や武者絵を描いた幟を立て、吹流しの代わりには、鯉の形を吹貫きとすることを考えだして、大人も子供も賑やかに楽しんだようです。やがて、外飾りだけでなく、家中で武者人形や座敷幟などを飾る風習が定着していきました。この伝統ある行事は、時を重ねるとともにいつの時代にも男児の健やかな成長を願う祭として、盛大に受け継がれてきました。昭和二十三年七月より五月五日は「子どもの日」として国民の祝日となり、ますます隆盛を極めてきています。

知性、仁徳、勇気は忠保の願い

戦国時代、智、仁、勇の三徳をそなえた武将は、武士の理とされていました。それはまた、忠保の願いでもあります。知恵賢くて心広やかなもののふのように、知性と仁徳と勇気をそなえて健やかに成長してほしい——五月のまばゆいまでの陽光のように、いつまでも輝き続けてほしい……お子様の雄々しいご成長への祈りでもあるのです。

権入 春日 「五号」	5
権入 武藏 「五号」	
金小札腰取威 緑樹 「八号」	
黒小札腰取威 英風 「八号」	
腰取威 英氣 「十・十二号」	6
腰取威 栄進 「十・十二号」	



写真は十号

号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
7	34	36	58	52
10	43	50	72	64

- 正絹糸威
- 矧ぎ合せ鉢
- 鎖佩楯
- 紗張り京櫈

新作
明知
一櫃入
[七・十号]



写真は十号

号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
7	34	36	59	52
10	43	50	77	64

- 正絹糸威
- 矧ぎ合せ鉢
- 鎖佩楯
- 紗張り京櫈

新作
大剛
一櫃入
[七・十号]



写真は十号

号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
7	34	36	58	52
10	43	50	77	64

- 矧ぎ合せ鉢
- 星植込み鉢
- 鎖佩楯
- 紗張り京櫈

新作
英達
一櫃入
[七・十号]



写真は十号

号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
7	34	36	58	52
10	43	50	72	64

- 正絹糸威
- 矧ぎ合せ鉢
- 鎖佩楯
- 紗張り京櫈

新作
御火鎧
一櫃入
[七・十号]





時代考証の入念さと匠の技

忠保の甲冑が、常に安定した高い評価をいただいているのは、経験に裏打ちされた技の確かさ、甲冑づくりに取り組む真摯な情熱など、その智と技と心のすべてを傾注し、甲冑づくりに徹しているからに他なりません。

とりわけ、時代考証の入念さは常に他の追随を許さず、膨大な資料を調べ、細部にわたって検証・検討し、でき得る限りの情報を甲冑づくりに反映させております。

忠保の甲冑には、飽くなきこだわりがすみずみに光っております。

新作 一敷目威 隨兵の大鎧

新作 一敷目威 隨兵の大鎧 [七号]

号数 間口 奥行 高さ 高さ(小顎まで)
7 34 36 61 52

- 敷目威
- 別ぎ合せ鉢
- 鎖佩橋
- 紗張り京櫛

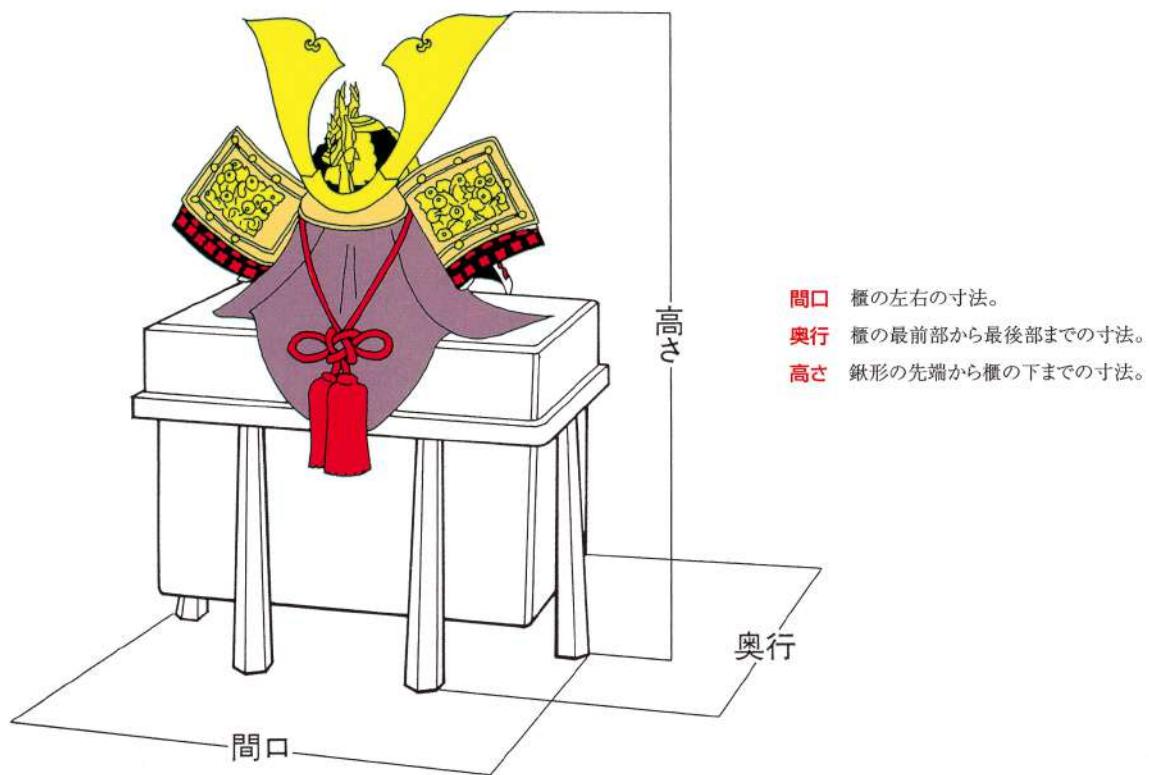
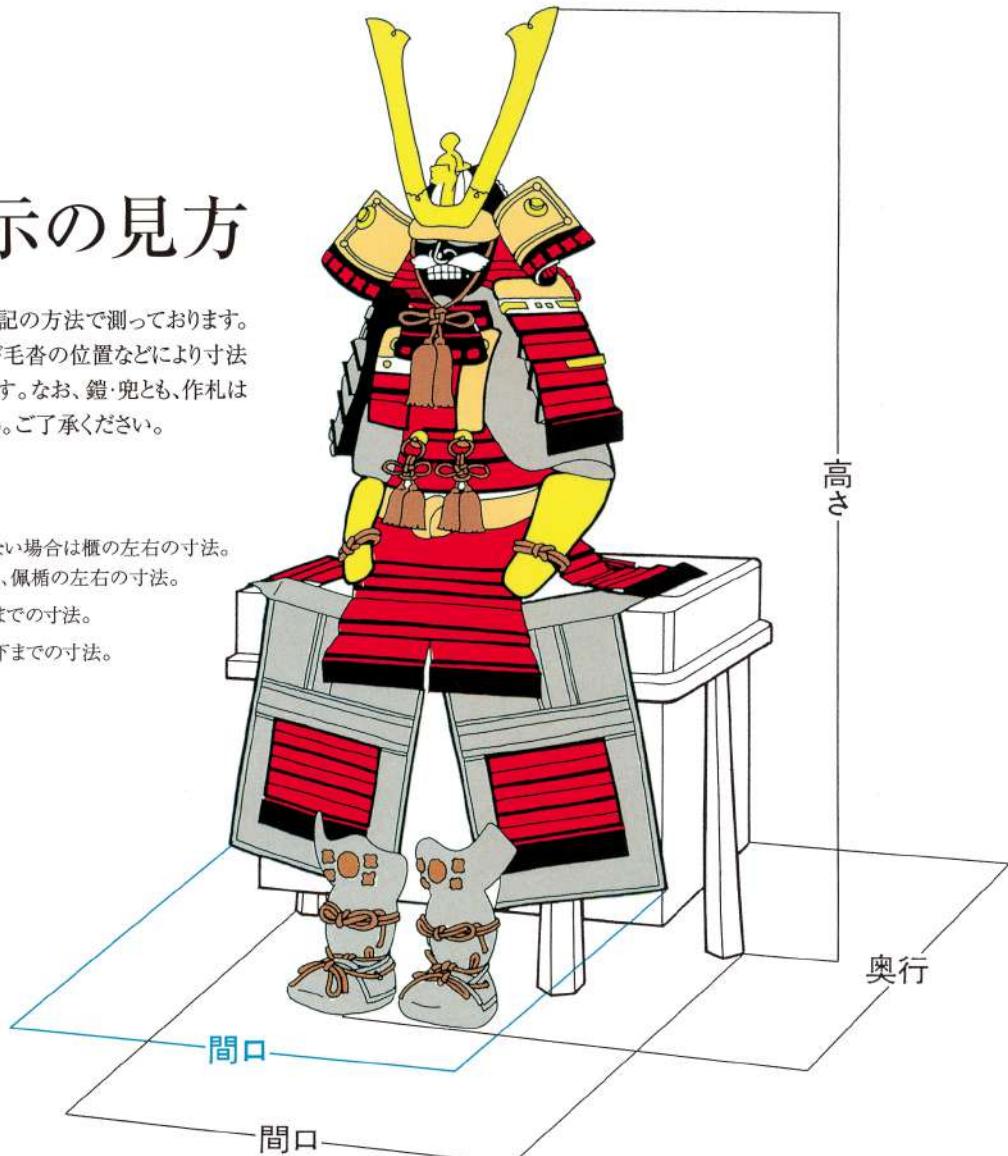
鎧・兜 寸法表示の見方

カタログの寸法表示は、下記の方法で測っております。鉢形・佩楯の角度、および毛沓の位置などにより寸法が多少異なることがあります。なお、鎧・兜とも、作札は寸法に含まれておりません。ご了承ください。

間口 佩楯が櫃より出でていない場合は櫃の左右の寸法。
佩楯が櫃より出ている場合は、佩楯の左右の寸法。

奥行 毛沓から櫃の最後部までの寸法。

高さ 鉢形の先端から櫃の下までの寸法。





号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
5	26	28	33	28



御兜
忠保



号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
5	26	28	36	28



御兜
忠保



号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
8	30	27	38	30

●黒小札色々威



黒小札色々威
忠保



号数	間口	奥行	高さ	高さ(小顎まで)
8	30	27	42	30

●金小札腰取威



金小札腰取威
忠保



写真は十一号

号数	間口	奥行	高さ	高さ(ハサマまで)
10	32	28	41	34
12	34	28	44	38

- 正絹糸威
 - 腰取威
 - 矧ぎ合せ鉢
 - 正絹忍び緒
- 10号は黒塗り鉢 覆輪なし



栄進
正絹糸威
腰取威
矧ぎ合せ鉢
忠保



写真は十一号

号数	間口	奥行	高さ	高さ(ハサマまで)
10	32	28	46	34
12	34	28	48	38

- 正絹糸威
 - 腰取威
 - 矧ぎ合せ鉢
 - 正絹忍び緒
- 10号は黒塗り鉢 覆輪なし



英氣
正絹糸威
腰取威
矧ぎ合せ鉢
忠保

古代の甲冑は埴輪によつて傳ふことしかできませんが、大鎧は平安時代に入つて武士が興ると共に、武将が着用した晴れの第一式装として、実用と意匠の両面において、日本独特の発展を遂げました。騎馬による射戦が中心であつたため、馬上での活動を自由にし、鞍の上で安定を図るため、どつしりとした草摺(くさづり)をつけ、兜は眉庇(まびさし)が大きく垂れて顔を覆うなど、弓矢に対するさまざまな工夫がはらわれています。

その後、戦いの形態が変わると、重い大鎧から、軽快な胴丸を着用するようになり、さらに改良が重ねられました。

情念の凝集 日本の甲冑「大鎧」

十四世紀になり、騎兵に不都合な山岳戦や打物(刀やなぎなた)の合戦が盛んになると、武将たちもより軽快な胴丸を着用するようになり、さらに改良が重ねられました。



腹巻・胴丸



大鎧



— 忠
保 の 甲
冑 —

*このカタログに掲載の商品の色は、印刷のため実物と異なる場合があります。

株式会社 大越忠製作所

〒343-0805 埼玉県越谷市神明町1-39-2
TEL.048(962)1166(代) FAX.048(965)4889